

■田村耕一 陶芸家。鉄絵陶器において独創的なものを生み出し、重要無形文化財保持者(人間国宝)になるも、直後に没した。

たむらこういち

本格政党内閣1918＝ 栃木県安蘇郡犬伏町大字富岡で、\_節句人形製造卸を営む田村林次(三代愛林斎観月)の次男に生まれる。

原敬首相暗殺1921＝ 3歳：

治安維持法・1925＝ 7歳：安蘇郡犬伏尋常小学校に入学、

金融恐慌・・1927＝ 9歳：

共産党事件・1928＝10歳：近所に住む9つ年上の\_三井安蘇夫が東京美術学校(東京藝術大学)の受験のため、石膏首を模作しているのを毎日のように見に行き、三井が美校生になると、近くの三義山麓の越名沼で写生するのに同行。

満州事変・・1931＝13歳：

二二六事件・1936＝18歳：

日中戦争始・1937＝19歳：

健保+総動員1938＝20歳：

第二次大戦始1939＝21歳：

日米開戦・・1941＝23歳：

・・・・・1942＝24歳：

敗戦・・・1945＝27歳：

新憲法公布・1946＝28歳：

新憲法施行・1947＝29歳：

極東裁判決・1948＝30歳：

三大事件・・1949＝31歳：

朝鮮戦争始・1950＝32歳：

独立回復・・1951＝33歳：

テレビ放送始・1953＝35歳：

自衛隊発足・1954＝36歳：

国連加盟・・1956＝38歳：

なべ底不況・1957＝39歳：

インスタントラーメン・1958＝40歳：

美智子妃・・1959＝41歳：

安保闘争・・1960＝42歳：

タイタイ病始・1961＝43歳：

全国総合計画1962＝44歳：

TV宇宙中継始1963＝45歳：

大学紛争始・1965＝47歳：

いざなぎ景気1966＝48歳：

美濃部都知事1967＝49歳：

震ヶ関ビル・1968＝50歳：

大阪万博・・1970＝52歳：

ドルショック・・1971＝53歳：

日中国交回復1972＝54歳：

石油ショック1973＝55歳：

角栄金脈辞任1974＝56歳：

クランブル事件1975＝57歳：

田中角栄逮捕1976＝58歳：

JALハイジャック・1977＝59歳：

成田衝突・・1978＝60歳：

革新大敗北・1979＝61歳：

貿易摩擦問題1980＝62歳：

・・・・・1981＝63歳：

中曽根内閣・1982＝64歳：

ドイツユーロ・1983＝65歳：

・・・・・1984＝66歳：

ジャンボ機墜落1985＝67歳：

バブル始・・1986＝68歳：

竹下内閣・・1987＝69歳：

栃木県安蘇郡犬伏町大字富岡で、\_節句人形製造卸を営む田村林次(三代愛林斎観月)の次男に生まれる。

東京美術学校図案部の先輩富本憲吉の誘いにより、輸出陶磁器のデザイン研究所設立に参加するため、京都に赴き、同じく1年先輩の松風栄一主宰の松風研究所に、デザイナーとして入所、主な仕事が輸出陶磁器の模様だったため、陶磁器の制作技法に精通する必要を感じ、富本から薫陶を受け、四代清風与平に競輔成形を学び、京都の陶芸家の教示を受け、さらに自主的に、各地の窯場で窯焚きの手伝いをする。

富本憲吉を代表に創立された新匠美術工芸会(後に新匠会)参加、

\_帰郷し、野州産業の赤見焼創業に参画。第2回栃木県芸術祭の初めての工芸展に、「鉄絵銅彩百日草文鉢」を出品し、芸術祭賞を受賞。審査員の濱田庄司に認められる。

\_佐野市久保町に倒焰式の薪窯を築き、

\_濱田庄司の推薦を受け、益子の(栃木県窯業指導所)(現在の栃木県窯業技術支援センター)技官となり、陶芸研究に専念、週末のみ佐野に帰る生活に入る。直前に入所していた濱田庄司門下の島岡達三とは、以後3年間机を並べることとなる。この年、生活工芸を志向する(ココ工芸)の結成に参加し、

栃木県陶芸作家展に出品。他のフループとの\_(生活工芸集団)の結成にも参加、以後10年会員となる。

\_窯業指導所を辞め、佐野市久保町に四室の登り窯を築き、作家活動に入る。

日本橋高島屋で第1回個展を開催。以後、同所で毎年開催。\*朝日新聞社主催の第5回現代日本陶芸展に初出品した「芒図楕円大皿」で第三席松坂屋賞を受賞。以後、同展には毎回出品。

\_前年度の実績により第3回日本陶磁協会賞デビュー、以後、鉄絵を主として洗練を加え、

第7回現代日本陶芸展で「黄柚野草図大皿」が第三席松坂屋賞。佐野市文化財保護審議委員会委員になり、

国立近代美術館の(現代日本陶芸展)に「鉄絵楕円皿」を招待出品。

以後6年、日本橋高島屋の第1回陶匠(陶芸)五人展に、松風栄一らと出品。\_第7回日本伝統工芸展に初入選した「鉄絵草花文大皿」が奨励賞となり、以後、毎回出品する。

この年、佐野宝龍寺和光殿で個展。新匠会会員となり、\_第16回新匠会公募展で「緑柏梅文楕円皿」が富本賞。第8回日本伝統工芸展で「黒柏流芒文大皿」が奨励賞。オーストラリア、ニュージーランド巡回の(現代日本美術展)に招待出品。文化財保護委員会、東京近代美術館、京都近代美術館買上と続く。

第11回現代日本陶芸展、第9回日本伝統工芸展に監査委員として出品、以後、監査委員、審査委員として出品。日本工芸会正会員となり、佐野市庁舎ホールの陶壁「伸びゆく佐野」を制作。

国立近代美術館京都分館(現在の京都国立近代美術館)の(現代日本陶芸の展望)展に、翌年、東京国立近代美術館の(現代国際陶芸展)に「鉄柚梅文大皿」を招待出品、明陶会陶芸展に5年間、出品名陶百碗展に4年間出品し、地元の佐野はじめ、全国主要都市で個展を開催するなど間、\_陶器に酸化鉄を付けて文様表現する鉄絵の技法を開発し、銅彩で色彩を加えた創造性に富む作風を確立。

なほ高島屋の第1回陶美会(以後4年)。栃木県文化財調査委員会委員となり、3年間務める。

日本工芸会理事に推される。日本橋三越で清水卯一、藤本能道とともに陶芸三人展。

\*母校の東京藝術大学助教授に就任。トルコ・イスタンブール国際陶芸展に「鉄柏菊花文深鉢」を出品してグランプリ金賞になるなど、国際的な評価も得、

京都、東京国立近代美術館共催の(現代陶芸の新世代)展に招待出品。日本工芸会常任理事に推される。通産省主催の第3回ジャパンアートフェスティバル(国際芸術見本市アメリカ巡回展)に随行して渡米、9大学で陶芸を指導、後にメキシコの陶芸を研修旅行。以後、釉薬の色彩を鮮やかに対比させる作風に変る。

京都、東京国立近代美術館共催の(現代の陶芸)展に招待出品。「陶芸の技法」刊行。栃木県文化功労賞。

毎日新聞社・日本陶芸展組織委員会共催の第1回日本陶芸展で推薦招待出品、以後毎回出品。

日本工芸会陶芸部会長、栃木県文化協会理事に推される。

「田村耕一五十周年(怨の下が皿)」刊行。日本橋三越での日本陶磁協会主催の(現代陶芸選抜展)に出品。この間、\_白泥や黒陶への絵付け、白磁、染付も試みて高い完成度を示すが、中心的な作風は、青磁や失透白釉への絵付けで、この年の個展で発表された青磁への彩色絵付けは革新的な試みである。

「陶芸技法入門」刊行。以後、銀座和光の陶芸秀作展に毎回出品。\_第2回中日国際陶芸展に招待出品。

第3回中日国際陶芸展に出品。栃木県文化協会常任理事に推される。

銀座黒田陶苑で、藤本能道、加守田章二とともに(陶板三人展)。佐野市文化会館研究協議会副会長に推される。\_日本陶磁協会賞金賞。日本経済新聞社主催の東ドイツ巡回(日本陶磁名品展)に招待出品。

第2回日本伝統工芸耀々会に出品。「陶芸入門」刊行。\_教授に就任して、母校での後進の指導にもあたり、

資生堂ギャラリーの(第4回現代工芸展)に招待出品。\_佐野市文化会館運営委員長に推され、同館ホールの陶壁「翔鶴」を制作し、佐野市市政功労者の表彰を受ける。

その後も連年のように、全国主要都市で個展を開催。\_紺綬褒章。

日本工芸会副理事長。この頃には、\_褐色の素地が見え隠れする白釉の上に銅彩と鉄絵が華麗な意匠美を生み出して「田村陶芸」が完成、以後、それらの応用と展開による幽遠な生命感あふれるものになって行く。

この前後、日本経済新聞社主催(現代陶芸百選展)、大津、池袋西武(やきものから造型へ)展に招待出品。

この前後、読売新聞社主催(現代の茶陶百怨展)、毎日新聞社主催第1回全日本伝統工芸選抜作家展に出品。

「田村耕一作陶集」刊行。インド、パキスタンの陶磁器製作を研修旅行する。\_紺綬褒章。

サントリー美術館主催の(日本の焼きもの一皿と鉢100)展に招待出品。\_ミュンヘン他2都市巡回の(土と炎)展に招待出品、ミュンヘンとデュッセルドルフで「日本のやきもの」を講演。ミュンヘンで個展。

東京藝術大学藝術資料館で藤本能道とともに同大学退官記念展開催。停年退官し、名誉教授に推され、

日本工芸会副理事長に就任、宇都宮市庁舎ホールの陶壁「宇都宮の詩」を制作。\*鉄絵陶器によって重要無形文化財の保持者(いわゆる人間国宝)に認定され、ホテル・ニューオータニで、日本橋三越の主催の(人間国宝田村耕一展)開催。佐野市名誉市民になったが、

胆のう癌で没した。勲三等瑞宝章追贈。

「人間国宝田村耕一作品集」が刊行され、翌年以降、連年のように回顧展が開催される。

Wikipedia「田村耕一」をベースに、栃木県立美術館「創造の手わざ 近代工芸・栃木の七星」で大幅追補、